

2026年(令和8年)3月4日(水曜日)

大手と協業 製品性能強化

建設テック企業のネクステラス(本社・札幌)が、大手建機レンタル会社などと協業し、自社開発製品が持つ可能性を広げている。木下大也代表取締役CEOは「お互い違っていてこそかみ合わせがある。目線や規模、業界が違っても」と組むことが大事」と強調する。

(経済産業部 阿部みほ)



ネクステラスがこぶし建設(本社・岩見沢)と共同開発した人工知能(AI)による合図者シエスチャー検知システム「A.I.s」(アイズ)に西尾レントオール席などに設置することで死角からの合図も認識できる。



協業で誕生した「西尾レントオール版A.I.s」(西尾レントオール提供)

▷…ネクステラス…◁

異なる視点で互いの価値高め

製造開発経験が豊富な西尾レントオールの知見を反映させ、約1年の開発期間でオリジナル要素を追加。2月に「西尾レントオール版A.I.s」のレンタルを始めた。

同社の提案で加えた機能の一つが、接近を知らせる距離検知。現場で二ミースが高い距離検知と一体化させれば複数の機器を取り付けずに済む。ただ、A.I.sは単眼カメラのため距離検知には2眼やセンサーが必要で、単眼で距離検知する技術を共同開発した。

オペレーターが合図者に緑の点灯で返事するアンサーバック、映像録画のほか、合図動作でバックホイール旋回自動停止などができる外部接点出力といった機能も追加。木下CEOは「A.I.sのコンセプトを理解して、互いに異なる立場で開発できた」と回顧。「大手には資金力と歴史があり、目線の違いもミックスできた」と評価した。

一方でA.I.sは精度の低さが課題の中、取り組んでいるのがトプコンとの協業だ。測量機による計測技術でA.I.sの精度向上を見据える。「測量機という建設業になくてはならないものとうまく接点を見いださせている」と話す。

ネクステラスの看板商品「A.I.s」は2020年に開発した。その中で「CADが広がってARが生まれる」と、会社員時代から接点があった福井コンピュータとの連携を6年以上続ける。同社がTerrace ARと連携できるフォーマットを提供するなど、ソフトウェア企業同士で機能向上を図ってきた。「スタートアップ企業」のニッチな目線と(大手企業の)広い目線を組み合わせて互いの価値を高めてきたと強調する。

ネクステラスは19年10月の設立から6年半と道半ばだが、「大企業が目を向けないところでもゆくゆくは大事な分野だと提案し、思いを受け取ってもらっている」と話す。「建設業界を新しい技術でわくわくさせたい」と意気込む。